

起業挑戦

昔ながらの湯治場で、今も観光業が盛んな別府市。留学生や障害のある人も多く暮らすこの地には、よそから来た人を受け入れる懐の深さがある。そんな別府でなら、きっと何か新しいことができるはず。竹細工、福祉、留学生支援などの分野で活躍する若手リーダー4人が、アドバイザーと共に起業の可能性について語り合った。



竹を編む様子

知名度をアジアで生かせ

台湾から3週間の滞在

広石 まずは自己紹介から。

岡本 大分ロボケアセンターでプロモーターをやっています。センターは、下肢が弱った人や高齢者にロボットスーツ「HAL」を装着してトレーニングする場所。先々月、台湾からの利用者が3週間滞在して集中トレーニングをしました。海外第1号です。別府の特性を生かし、アジア圏から滞在型で利用者に来てもう仕組みづくりを進めています。

若手リーダー
大分ロボケアセンター・プロモーター
岡本美鈴 さん

後藤 私は別府生まれの別府育ち。東京の大学に行き、ITのベンチャー企業に就職して、約6年前にRELAYという会社を立ち上げました。介護福祉事業と留学生支援、地域事業開発をやっています。1人でやっているの、会社をこれからどう組織化していくか、人とのつながりやノウハウをどうコミュニティに落とし込んでいくかなどを考えています。

大谷 生まれも育ちも埼玉。別府には約11年前、竹芸工を教える全国で唯一の公的機関「県竹芸芸芸・訓練支援センター」に入るために来ました。別府竹細工は大分県で唯一、伝統的工芸品に指定されているのに、作る人は日々食べていくのが厳しい時代になっています。昨年から、県や市の協力で米国に販路を開拓する3カ年の事業に取り組んでいます。

吉武 商工課で約半年、大分ロボケアセンターの企業誘致の仕事をしました。市竹細工伝統産業会館の担当もしています。商店街やNPOとのつながりもあり、仕事は多岐にわたります。

鍵野 中小企業診断士として大分で経営コンサルタントをしています。県よろず支援拠点とは本年度からの国の事業で、個人や零細企業を応援

しようというもの。とにかく、来た人の話をよく聞いて、強いところを見つけて、それを伸ばして「これやりましょう」という話をしています。課題はもっと別府の人に来てもらうことです。

家賃が高いハードルに

吉武 キャリアのある竹芸作家はある程度収入があるけど、学校を卒業したての人はバイトをしながら空いた時間に作っています。組合の力や市のフォローも必要でしょう。県の3カ年の支援も新しく出てきたもの。でもそれから先、自分たちでどうやっていくかという課題はみんな持っています。県よろず支援拠点など第三者に相談する場ができたのは、どこに相談したらいいかという情報を流すチャンス。県も国もこれから創業に力を入れようという話なので、市も、いろんな情報を提供できるように頑張っていきたい。

後藤 私は学生のころ、ベンチャー企業の社長を呼んで講演会を開くなどの活動をしていました。だから東京では、学生の頃から起業している人が周りにいっぱいいました。でも3年前に別府に帰ってから、そういう学生に会う機会もないし、同じような経験をしてきた人にもあまり会わない。以前、商店街での起業を促進する事業があったと思うんですが、あれをまたやってもらえないでしょうか。

吉武 外国人のチャレンジショップという形でやった事業のことでしょう。期間を決めて、商店街に店を出すという。伝統産業でも、商店街の空き店舗対策としてプラットフォームという事業をしました。2013年度で基本計画は終わって、今も竹細工の工房の支援は続いています。

鍵野 店をやりたいというニーズは多いけど、人が集まる場所ですらうとしたら最初の家賃が

高いハードルになることがあります。人の流れがある場所を実験的にお店をやってもらって、駄目なら入れ替わるとか、そういうことができたら面白い。

大谷 商店街の工房は家賃補助をもらっていますが、補助が終わった後のことを常に頭に置いておかないといけないと思います。

鍵野 うまくいっているところどうやってつなげていくかだと思います。竹細工とロボットスーツと、そこに線がでると人が流れます。

皆がファンになり帰る

岡本 センターの利用者に限らず、誰もが別府に来ると別府ファンになって帰っていきます。竹を見てもらう機会もつくることができます。別府にはこれ以上ないくらい強いコンテンツがいろいろあります。

鍵野 起業家として留学生はどうでしょう。

後藤 まず外国人が起業することはかなりハードルが高い。ビザの問題もあります。

吉武 飲食店をしたいという人はたくさんいますが、

後藤 立命館アジア太平洋大学(APU)のモンテ・カセム前学長と、外国人と日本人のグループとか日本企業の支店だったり、社内ベンチャーの形で起業させる仕組みがいまいちないかという話したことはあります。知り合いのナイジェリア人は数年前、在学中にインターンシップでエネルギーの会社で働いていました。東京の会社が、大分に支社をつくらせて、そこでAPUの学生をインターンシップやアルバイトで雇用して、商品を海外で販売するにはどうしたらいいか、調査やプロモーションをさせて、可能性があると思ったら社長や役員がその国に行ったりしていま

若手リーダー
RELAY 代表取締役
後藤俊介 さん

した。

鍵野 APUには割と裕福な人、リーダーになるような人が来ているので、別府のいいイメージをどうやって海外で活躍している人を生かしたい。

後藤 そういう人たちが若いうちに過ごしたのが別府というのはすごい財産です。同窓会も活発みたいです。

鍵野 竹製品の消費地も、これからアジアが経済の中心になり、お金持ちもアジアに出てくるので米国やヨーロッパだけではなくります。

大谷 10月からAPUの学生に、別府の竹の紹介とワークショップをしようと考えています。

広石 もともと竹細工は実用品だったんですよ。

大谷 農家で使う籠を作ったのが始まりです。別府竹細工は温泉との結び付きが強い。全国から別府に湯治に来たとき、別府竹細工協同組合専務理事 大谷健一 さん

若手リーダー
別府竹製品協同組合専務理事
大谷健一 さん

後藤 使っていた炊事用具が全部竹でした。それをお土産に持って帰って「いいものがある」と全国に広まったんです。いいストーリーがあるので、それを利用しない手はないと思っています。

驚かれる独特な地域性

吉武 大分ロボケアセンターも長期滞在型を打ち出しています。海外、国内、九州から、昔の湯治客のように長期滞在する人が来て、トレーニングする人はロボケアセンターに行って、一緒に来た家族は竹細工や温泉に触れたり観光したり。そういうドラマができればと期待しています。

鍵野 ソフト系の会社とか、アニメも含めてコンテンツ勝負の会社があったらいいですね。

鍵野 別府の旅館で竹製品を思い切り使っているところは、

大谷 夕食の飾りで使うというはあるけど、残念ながら地元物ではないですね。

鍵野 竹製品の日用品のイメージを展示する所があるといいと思います。生活スタイルを展示するに旅館が分かりやすい。例えば大分ロ

くっていくとか。

吉武 別府は工業出荷額が低い。工業、商業がどうしても弱い。だからやっぱり観光にプラスアルファしたもので何か考えないといけません。

大谷 東京から来た人を案内すると、みんな「一種独特だ」「また来たい」と言ってくれます。暮らしている人にとっては普通にある温泉も、よそから来た人はびっくりする。地域の資源として強みだと思います。それが自分のやっていることと結び付けばいいんですが。

鍵野 ストーリーを線にして、それ自体をお金に変えられるようにしないといけない。価値があるのは間違いないので、それに値札をつけてどう市場に参入するかです。

ブランド名理由に進出

後藤 大分ロボケアセンターの起業の理由を聞いてみたいです。

岡本 大分で起業したのは、別府の観光資源が大きかったと聞いています。それがあからこそアジア圏から人が来て滞在できる余地がある。別府なら、滞在して集中トレーニングできると、オフの予定も立てられる。そういうことを見込んでの立地です。実際そうだし、可能性もひひし感じています。もっと環境を整えたいと思われ、それだけのポテンシャルがあります。

吉武 やはりアジア、海外に向けてビジネスするときに、別府というブランド名を使いたいから別府に進出したいという企業もあります。大分ロボケアセンターも竹もそうですが、「なぜ別府でしたいのか」という理由を持ってもらえる人に別府に来てほしい。今はアート系の人がかなり来ています。商店街でイベントをやりたいという人もいて、そういうフォローをしていきたい。

鍵野 ビジネスは失敗するかどうかやってみなければ分かりません。「やってみたけど面白くなかった」というときにやめやすくなるのも大事なことです。「やった以上は」とギリギリまで頑張つて、借金が膨らむというのはよくない。

技術全て教え合う職人

広石 大谷さんが学校を卒業しても別府に残ってやっているのはなぜですか。

大谷 別府は竹細工の歴史があり、いろんな技術を持った先生や先輩がたくさんいます。技術的に悩んだとき、別府にいたら誰かに聞くこと必ずついていくアドバイスがもらえる。職人さんは自分の技術を人に教えないことが多いですが、別府の職人さんは全てオープンです。それは別府の宝だと思います。

吉武 今の60代、70代の伝統工芸士の先生たちが、「若い人に継承していくのが自分の仕事だ」と思ってくれている一面もあると思います。

大谷 後継者を育てるのは組合でも大きな目標になっています。一番の問題は、その後継者が独り立ちしてご飯を食べていけるようにすること。竹が生活必需品じゃなくなり、若い人や子どもが存在すら知らない時代が来ている。必需品じゃなくなった物をどうやって生活に呼び戻していくかが課題です。

鍵野 別府の旅館で竹製品を思い切り使っているところは、

大谷 夕食の飾りで使うというはあるけど、残念ながら地元物ではないですね。

鍵野 竹製品の日用品のイメージを展示する所があるといいと思います。生活スタイルを展示するに旅館が分かりやすい。例えば大分ロ

ケアセンターで、極限まで竹を使ったゲストハウスみたいなものをつくったら面白い。

岡本 実用性の高い物はデザイン性も高いですよ。かっこいいと思います。

広石 竹製品を旅館が使って、泊まった人は大分ロボケアセンターでケアを受けて、来るお客さんは留学生が連れてくるという。

後藤 つながりますね。

鍵野 別府は棚田も有名ですが、「棚田米とぐザルも別府竹細工です」という旅館はすでに。別府は素材があるから組もうと思えば組める。そこに起業の種があります。海外のお金持ちを呼び込むのも一つの策。長期ビジョンでプランニングしていくと「アジアのスーパーリゾート・別府」になる可能性があります。別府には「太陽の家」もある。外国人も障害のある人も、いろんな人を受け入れる懐の深さが別府にはあります。違う感覚のベースがあるというのは貴重なことです。

バリアフリーも資源に

広石 大分ロボケアセンターは別府だから立地しているし、大谷さんも別府だから残っている。後藤さんは留学生と地元をつないでいます。

後藤 話を聞いていると、別府はいろんなものを受け入れる多様性がある街だなと思います。

大谷 別府というと竹瓦の辺りの路地裏のイメージがあります。狭い路地にいろんな人がいて、いろんな考えがあって、いろんな生活をしている。昔からいろんな人が来ていたから、地元の人によそから来る人を受け入れる土壌があるんですね。

後藤 観光業が主体なので、誰でも彼でも受け入れないと始まらないというのがあります。

岡本 亀川駅から太陽の家までの間に車を置いて歩いて通勤していますが、学生も車いすの人も、同じようにそれぞれの場所に向かっていく流れがすごくバリアフリーだと感じます。最初はそこに驚きました。でも地元の人に言わせると「当たり前だ」と。

鍵野 それも資源です。誰もがコミュニケーションに入りやすい、ひたすら参加しやすいというのはビジネスでも大事です。

袖触れたら好きになる

広石 別府に本社を構えなくてもサテライトオフィスをつくるか、クリエイティブな仕事を別府に置くかでもいいですよ。いろいろ話してきましたが、キーワードを考えましょう。

岡本 「袖が触れたら好きになる」という言葉を考えました。外国人も、旅行者も、皆さん別府を好きになって帰ってくれています。それがたぶん触れ合う袖で、今すぐでなくても、いつか起業の場として別府を選んでくれるかもしれません。

広石 留学生も大学生活で別府に袖が触れて、本国に帰ったり東京で働いたりしても別府を忘れないでPRしてくれています。

岡本 私も今までは別府に食事に来るくらいの感じだったけど、いろんな人と接する中で感じ方が変わってきました。

広石 別府が挑戦する土台として優れているということなんですよ。アジアがこれから伸びてくる中で、留学生がこれだけ来ていて、温泉があり、別府というネームバリューがある。ここで何かを起こしたらそれがアジアに発信されるというのが別府のメリットだと思います。文化的なもの、ビジネスも、別府がアジアのハブになれたらいいですね。

コーディネーター
大分合同新聞記者
広石修一

タバスコ®ブランドペパーソースって何にかけます?
ピザ? パスタ? もしそれだけなら... もったいない
ですよ! ピリリとスパイシーなタバスコ®ソースは、
焼きそばにも唐揚げにもカレーにもサラダにも、
そう! ありとあらゆるメニューに意外とハマる!
この夏、タバスコ®ソースとの予想外の出会いを、
ぞくぞくとみなさんにお届けしていきます。さあ
タバスコ®ソースを手にと、トライ! タバスコ®
<https://www.facebook.com/TabascoJapan>

TABASCO® is a registered trademark for sauces and other goods and services; TABASCO, the TABASCO bottle design and label designs are the exclusive property of McIlhenny Company, Avery Island, Louisiana, USA 70513. www.TABASCO.com